

まれる。

蓋し本問題に於ける根本史料は極めて零細なる斷簡零墨であり、之を涉獵し、驅使し、綜合して結論を見出すのは容易の事でない。著者は近世以前の貨幣史に基礎的研究の必要を感じ、「廣汎なる史料の検討に嚴密なる其批判」並びに「深廣なる再吟味の切要」を主張するものであり、その下に未開の境地に入つて博引傍搜、微に入り細を穿つて紛糾せる貨幣の流通に關し其真相を把握せんよしたる眞摯なる研究心、不撓の奮闘方こそは本書を繙く者の等しく感ずる所であらう。而して其等の史料の統計的検討を試みて一新機軸を出し、學問的體系を與へたる所、我が國貨幣史を大成する劃期的文獻の一たるを失はぬ。

三浦博士は序文を寄せられて「本書に依つて始めて此方面に光明を與へらるゝ事は少くない」と稱揚せられ、更に著者の處女出版を學界に送り出すに當り「學界により以上の寄與をなし、稱讚を博する日の到來を期待」し、「此かゝりやかしき期待を以てはなむげの辭」させられて、

その前途を祝福せられてゐる。

貨幣流通の表面的過程に流れず、社會經濟史の見地より觀察せる本書を學徒に薦めたい。(菊版四五八頁、コロタイプ圖版三葉、東京刀江書院、價三・二圓)(寺尾)

◎近代
日本外國關係史

田保橋 潔著

著者は十年來近代日本外國關係史を研究し、其の業績の一端を時々諸雜誌に發表されたが、今舊稿を全部改訂し其後の新研究をも加へて本書を世に出だされた。其の記述の範圍は十八世紀以降十九世紀中期に至る約一百年間で、露、英、米三新興勢力が次第に我國を壓迫し、幕府當局をして苦心焦慮、遂に其の祖法たる鎖國令を廢棄し、再び歐洲人に國土を開放するの已むなきに至らしめた事實を、内外の史料によつて詳細に記述してあつて、日本近代外交史の研究には必讀の書である(菊版七二〇頁、東京刀江書院發行、價六・二〇圓)(松野)

◎日本民族學 神事篇、風俗篇、歴史篇 中山 太郎著

著者は柳田氏折口氏等と共に日本民俗學の成立に全幅の努力を拂つた人であり日本巫女史を始め多くこの方